

平成29年度第1回和歌山県総合教育会議 議事録

1 開催日時 平成29年9月7日(木) 午後2時00分から午後3時30分まで

2 開催場所 県庁北別館4階 第1委員会室

3 出席者 知 事 仁 坂 吉 伸  
教 育 長 宮 下 和 己  
教 育 委 員 竹 山 早 穂  
教 育 委 員 佐 藤 律 子  
教 育 委 員 野 村 富 や  
教 育 委 員 桑 原 義 登  
教 育 委 員 沼 井 健 次  
教 育 企 画 監 牧 野 行 治  
企 画 部 長 高 瀬 一 郎  
環 境 生 活 部 長 山 田 成 紀

4 議 題 (1) 全国学力・学習状況調査の結果について  
(2) その他

5 議事内容

事務局 ただいまから、平成29年度第1回和歌山県総合教育会議を開催いたします。開会にあたりまして、仁坂吉伸 和歌山県知事をご挨拶申し上げます。

知事 皆さん、久しぶりの総合教育会議ですね。教育委員会の方からテーマを出してもらって皆さんのお話を聞きながら議論していきたいと思います。本日のテーマの学力もそうですが、不登校などいろいろな問題があります。さらにはコミュニティ・スクールをつくっていくということもありますので、どのような準備をしておかなくてはならないかということ、皆さん、遠慮なく意見をを出してもらって、良い教育を進めていきたいと思います。よろしくお願いします。

事務局 本日もご出席いただいております方々については、お手元の出席者名簿に記載しております。それでは、会議の進行は、仁坂知事をお願いいたします。

知事 本日は、「全国学力・学習状況調査」の結果が出ましたので、これを基に学力の向上について議論したいと思います。まず最初に教育長から資料と本日の進め方について説明をお願いします。

教育長 「全国学力・学習状況調査」の結果が出ましたので、それを基に和歌山県の

状況とそれに関わる様々な課題についてご意見をいただきたいというのが趣旨です。まず、資料1ですが、この会議用に結果をまとめさせてもらった資料です。それから資料2は、記者会見の資料です。それから資料3は、私どもが取り組んできました学力向上プログラムの今年度の分です。昨年度の分も学校に掲示して、スケジュールを意識しながら取り組んでおります。資料4は、学習状況調査の結果についてです。項目がたくさんありますが、とくに今日議論していただくことと関連するようなどころについてまとめさせていただいております。別に分厚い資料がありますが、今年度4月に行われた全国学力調査の問題です。それと課題があった国語について、授業事例集や県でつくった問題集も参考として置かせていただいているのでご覧ください。

学力について、担当しております教育センター学びの丘の学力対策課長の犬堀の方から説明させていただき、そのあと牧野教育企画監の方からお話をしてもらった後、議論していただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

大堀学びの丘  
学力対策課長

学力対策課の犬堀です。説明をさせていただきます。

私の方からは、「全国学力・学習状況調査」の教科に関すること、学習面や生活面に関する質問紙調査の結果に関すること、これまで取り組んできたことの3つに関してご説明いたします。

まずは、お手元の資料1をご覧ください。教科に関する結果に関しては、昨年度は大変厳しい結果となっていたのですが、今年度は全ての教科で全国平均を上回るということはかないませんでした。8つの教科のうち6つは全国平均と同等となりました。過去は、全国平均との差は大変大きかったのですが、今回の結果では、全ての教科で全国平均との差が大きく改善してきたと考えております。

昨年から国の方では、正答率を整数で表しています。参考に順位をつけているのですが、昨年から見ると、順位も回復しています。このような良い結果になったということを大まかにいいますと、まず、一つ目に、教科の問題数でいうと少ない教科では問題が9問、多い教科では36問ありますが、それぞれ大きく落ち込んだ問題がありませんでした。全国平均に近いところで結果が出ましたので、これが大きな要因かなと思っています。二つ目に、過去から見ますと本県の子供たちは無解答率、自分の考えを書くというような問題については、書こうと思っても何をどう書いていいかわからないとか、あきらめてしまう、何も解答を書けないということが大きな課題でした。国の調査官からは、和歌山の子供は粘り強さに欠けるのではないかとのご指摘も受けたことがあります。この点を重視して長年取り組んできました。その結果、徐々に改善してきたのですが、今年度初めて、無解答率が全ての教科で全国平均よりもいい意味で低くなりました。何か自分の思いを書けるようになってきたということです。それに伴って、記述式の問題についても長年全国平均を下回っていたのですが、今年度は中学校国語以外で、記述式の問題が全国平均を上回ることができました。これも長年の取組の成果だと考えています。ただ、小学校国語

や中学校国語について、文章から必要な情報を取り出して、複数の情報を関連付けて自分の考えをまとめて書くということについては、まだまだ課題があります。今後も力を入れていかななくてはならないと考えています。資料1の下の方ですが、3の項目をご覧ください。今年の中学校3年生が3年前の小学校6年生の時の結果と今回の結果を比べ、表にまとめたものです。なぜかといいますと、今年の中学校3年生は小学校6年生の時に、特に国語Aの基礎問題については、大変課題が大きかったんです。特に、「五十歩百歩」「百聞は一見にしかず」など語彙に関する項目が全国に比べて10ポイント近く低く、これが全国で最下位になった大きな原因でもありました。今年度中学校3年生の国語Aをみますと、全国平均と同じで、しかも、「急がば回れ」「襟を正す」といった語彙に関する項目は全国平均より3ポイント程度上回るといって、前回弱点であったところが、今回は強みとなりました。県としても語彙の部分については力を入れてきており、一定の成果が出たと受け止めております。

続いて、学習面や生活面に関する質問紙調査の結果について説明をします。県教育委員会では教科の正答率と同様、またはそれ以上に子供の質問紙調査の結果を重視してきました。これについては、資料2の5ページをご覧ください。子供が回答している状況からは、教員の指導であったり、生活状況がよく見えてきます。5ページの中程から、「授業の内容はよくわかりますか」という質問に特に着目してきました。やはり子供にわかる授業づくりをしたいということで、教員研修であったり、学校訪問ということに力を入れて取り組んできました。年々よくわかるという子供たちが増えてきていまして、中学校国語でも、全国より若干肯定的な回答が下回っているのですが、かなり改善してきていると受け止めています。次のページをご覧ください。6ページのよくわかる授業づくりの手立てとして、県では「授業づくり基礎・基本3か条」という授業のスタイルを定めて取り組んできました。簡単にいいますと、今日はということを学んでいくのかについて、子供に見通しをもたせるということです。学習のねらいであったり、どのような力をつけるかということであったり、振り返りもしましょうということなのですが、それに対して子供たちがどのような反応をしているかというのが(3)、(4)に記載されている状況であります。年々肯定的な回答が増加してきており、全国平均よりも上回ってきております。ここについては、大変成果が出てきていると考えております。続いて8ページをご覧ください。よくなってきていることもあるのですが、今よく言われるような変化の激しく先が見通せない不透明な時代をたくましく生き抜く力をつけるような学習活動、簡単にいいますと、自分で課題を設定し、自ら考え、それに取り組む活動や相手の話をしっかり聞いて自分の考えを伝えて話し合い活動をしていくというような活動をするということになります。こういう項目については、まだまだ課題があり、学校での学習活動をさらに充実させていくべきだと考えております。続いて9ページをご覧ください。(12)のところは大変ありがたいなと思うところです。「学校に行くのが楽しい」と答えているのは小中学校ともに全国平均を大きく上回っており、学校が楽しいと思っている

子供が多いことがうかがえます。その下の規範意識に関する項目のところの、「決まりは守る」「いじめはいけない」という認識をもっている子供は、全国と同程度に身に付いているということがわかります。ただ、課題も多いです。力を入れてきているつもりでもなかなか改善されないのは、10ページの家庭学習です。県の子供は、宿題はよくするのですが復習については、なかなかできていないのが現状です。小学校はよくなってきているものの、予習や、休日の学習をしないという割合は高くなっています。それから、11ページはメディアとの関係です。テレビゲームやスマートフォンの使用に関しては全国もそうなのですが、本県の子供たちも年々長時間使用する割合が大きくなってきていまして、ルールを決めているという家庭もあるのですが、ここは課題が大きくなってきていると受け止めています。なお、質問紙の調査項目については、資料4に45項目載せています。

最後に、これまで取り組んできた項目について説明します。資料1に戻ってください。資料1の2枚目です。長年、教員研修などの取組を行ってきたのですが、今回の結果に何が一番効果的だったのかということについては、中程の四角囲みに5点まとめています。やはり一番大きかったのは、昨年の課題を受けて取り組んだ市町村教育委員会との連携を密にして施策を進めてきたことです。市町村教育委員会に理解をいただき、共に学校へ出向き、指導しました。

「授業づくり基礎・基本3か条」が一層普及できたのは、この取組の成果だと考えております。次の②は、学力向上プログラムです。どの時期にどのような取組をするということが全教員に伝わるように、見える化して示してきました。これによって学校の取組が促進したと考えております。③は課題の大きい学校に市町村と県が一体となって継続して取り組んできたことです。調査はまだまだ不十分なのですが、今回の結果が良かったことを学校や市町村教育委員会にいろいろ聞き取りをしているところです。今回の成果の決め手になったのは、やはり④、⑤の指導資料ではないかという答えが圧倒的に多かったです。授業づくりの事例集や国語のマスター問題集を作成し、教員に配布しました。和歌山の子供の課題に対応した問題を、現場の国語の指導に力を入れている教員に作ってもらいました。現場目線で作っているので、学校現場からは、非常に使いやすいと好評でして、これを作れたのが今回の結果につながったと思います。ただ、改善したといっても、全国の状況に並んだだけですので、これからまだまだ取り組んでいくことは必要です。先ほど資料3で示しておりました学力向上プログラムは、どの時期にどういう取組をしていくということを今年4月から配布して、このスケジュールに基づいて、全ての学校で取り組んでもらっています。これを配ったおかげで、市町村や学校からも問い合わせがくるようになりました。スケジュールに合わせて、学校現場の方からそろそろこんなものを配布してくれるのかな、というような声が聞こえてきて、県教育委員会、市町村教育委員会、学校が一体となった取組になってきたかな、と強く感じております。簡単ですが、以上で説明を終わらせていただきます。

教育企画監の牧野です。今回の学力・学習状況調査につきましては、おそらくこれまでの10年間、平成19年から始まった調査ですが、遡れば昭和30年台の全国学力調査の状況も含めて、これまでの調査結果で、一時的にかもれませんが低迷から脱して、初めて全教科でほぼ全国レベルに達しました。そういう意味におきましては、これからの学力向上に向けた取組の方向性にとっても参考になると私は思っております。私は福井からこちらで働かせていただきまして3年目になるわけですけど、最初の2年間は精力的に県内の学校を訪問、指導してきました。数えていませんが150校は行ってるかなと思います。それから、延べにして50ぐらいの会場で研修として校長や教員あるいはPTAが集まる場所で、学力向上の土台づくりについて話をしてきました。こうして和歌山県の特徴的なところを理解してきたわけですが、本県にはたくさん課題があります。それを一つ一つしっかりと向き合いながら解決の糸口をつかんでいくということが、我々行政にとっても学校にとっても大切だと思っております。

いくつか紹介しますと、和歌山県は豊かな地域性の中であって、それも福井県のように小さな県ではなく、地域の文化というものが昔から育まれていて、そこでオリジナリティを発揮している大変魅力的な県だと思います。ただ、学力ということになりますと、それに向けて戦略的にいくぞという力をもつ市町村とそうでない市町村もあります。あるいは、同じ市町村の中にあっても、よし、突破していくぞというような学校とそうでない学校があるなど混在している状況があります。いわゆる学校間、地域間で問題解決に向けての共有化が図られておらず、バラバラ感があることが大変気になりました。今回は、今、担当者から報告がありましたように、市町村教育委員会や学校が危機感をもって取り組んだ成果が出たのかなと思っております。

また、教員の意識改革の問題があります。私がこちらに来た時に啞然としたことがありました。一つ例を言いますと、「全国学力・学習状況調査」の意義ですね。何のためにやるのかというところをしっかりと意識していない教員が多すぎる。順位付けの調査は廃止するべきだとの声もずいぶん聞いてきましたが、そう言いながらも問題を全然分析していない教員も多かったです。そういう中で、この調査は授業改善に資するものであるというしっかりとした意識をってもらわなくてはいけないんですね。これは、やはり校長先生をはじめ、若い教員を中心に意識が出てきたということをお肌で感じています。そういう成果も徐々に出てきたのだと思います。しかし、管理職のリーダーシップは、まだまだ甘いところもあって、もっと戦略的にやっていかなくてはなりません。

それから、保護者や地域に対して閉鎖的な学校も気になります。そうでない学校もたくさんありますが、これが、今回の学習状況調査からもうかがえます。子供たちの地域ボランティアが少なかったり、地域行事への参加割合についても、福井県と比べて小学校でいうと20ポイント以上低くなっています。そうした影響で、地域や社会での出来事とか、問題に関心が無い。地域をよくするために自分は何をしなくてはいけないのかを考える機会が少ない。もっと学校

の教育課程を地域や社会に開いていかなければならない。これについては、これからコミュニティ・スクールということもありますので、大人と一緒に考える機会をつくるという視点を教育課程の中で意識していくということが大切だと思います。

それから、県教育委員会と市町村教育委員会との関係ですね。昨年あたりからは、一体的な取組をしてきたと思っています。それまではどうしても県教育委員会と市町村教育委員会との連携がぎくしゃくしていて、距離感があったように思います。お互いの課題意識を共有して、一体となって具体的な形で推進していくというスタイルがとれたという成果もあると思います。

それから、小学校1年生から6年生までがなかなかつながらないんですね。今年はいいいんですけど、来年は心配ですよ。良い年の裏返しで、次の年は必ず下がるという状況がグラフでも現れています。ですので、そうならないような安定した学力の基盤を作っていかななくてはならないので、そのために学校で1年生から6年生までのしっかりした学びのシステムを構築していかななくてはならないということを、強く現場に対して指導しているところです。ただ、和歌山県と福井県との違いは中学校の問題だと思うんです。小学校と中学校では遊離していますよね。小学校では対話的な深い学びをやっているのですが、中学校になると突然講義式の授業になってしまう。そこがやはり本県の中学校が伸び悩む大きな要因だと思っています。そういった中で、小中連携を、授業を見るだけでも随分勉強になるのですから、そういったこともどんどん推進していかななくてはならないと思います。

それから、なんといっても授業づくりが重要です。子供たちが意欲をもって学び続けられるための「授業づくり、基礎・基本3か条」が徐々に定着しているということもありますが、一方で私は「課題テスト」のような取組も大事だと思っています。つくづく思いますが知識を定着させることがものすごく下手だと私は感じています。いわゆる知識というのは活用することで定着していくんですよね。活用させないとその時に覚えていても忘れてしまうんですね。そういった意味で、ドリルというと聞こえが悪いですが、和歌山県はあんまりやらないです。秋田県や福井県はどんどんやっています。例えば、紹介しますと、ここに、福井県の小中の全ての教科に関する問題集があります。和歌山県とははるか量が違うんですね。教職員組合でも「夏休みの友」という問題集を作っています。要するにそういうことが知識が定着していない原因だと思うんです。やはり、漢字を習ったら「明日、漢字のテストをやるよ」というように、5分間程度でいいので細かく続けてやっていくというスタイルも大事だと思います。国語で「たいしょう」という字があります。例えば調査の「対象」という言葉を漢字で書く問題が学力調査に出たんです。その同音異義語として、対するに照ると書いて「対照」、さらに線対称の「対称」という漢字がありますよね。この3つの漢字は習っているわけです。「たいしょう」という字がなぜ書けないのか。漢字の練習をしてドリルをやるだけでは駄目なんですね。一度習った漢字は使わないと駄目なんです。教室に貼り出されている作文を見ま

しても、5年生になってもひらがなだらけの作文が貼られている学校をたくさん見てきました。習った漢字を進んで使っていないんですね。先生も意識して添削していないという状況があります。やはりこういうところを上手く活用していくことで知識の定着につなげていくべきだと強く思います。繰り返し繰り返し学ばせることが大事です。担当者から話がありましたように、今回の成果もそういう点に重点を置いたことが結果に結びついたと思います。ただ、思考力を鍛えるような授業をしないと、特に小学校5年生、6年生、中学校、高校では文章を読む力、いわゆる読解力とか、資料を見て整理する力とかが備わっていないと思うんですね。そういった力を身に付ける授業をどんどんやっていかないと。また、思考力を鍛える手段として、読書活動があります。実は福井県でも私が行政にいた時は大きな課題でして、今回の調査でも「読書が好きか」という質問がありましたが、「読書好き」は、福井県よりも和歌山県の方が割合が高いんです。全国的にみると小学校では和歌山県31位、福井県43位なんです。福井県の子供は「読書好き」ではないんですよ。ただ、和歌山県との違いは何かといったら、頻繁に学校図書館へ行き、時間は短いけれども、ほぼ毎日本を読んでいる。和歌山県はほとんど本を読まない子供の割合が多い。こういう違いがあるんです。和歌山県の子供の読書をする割合を上げていくためには、やはり読書環境の整備が必要になってくると思います。それは、物理的な環境の整備だけではなく、意欲につながる環境づくりも大切です。この本はいいよ、と友達同士で本の紹介をし合ったりすれば、私も読んでみたいなという気持ちになるでしょうし、ブックトークをやったものなどを教室に掲示したりするなど、読書環境を整えるいろいろな工夫を学校でしていかななくてはならないと思うんです。そういうこともいろいろあるわけですけども、全国レベルからもう一歩踏み出して、和歌山県の学力をトップレベルまで持つていくためには、私はまだまだ足りないと思うんです。学校教育だけでは限界があるわけです。経済的な支援、家庭の教育力、そして地域のネットワークと協働といった視点を基に、どんどん子供たちを高めるために教育に入り込んでいくようなシステムを社会の中で作っていけば、必ず結果は出ます。和歌山県は、学力は全然駄目なので体力で勝負ということではなく、学力でも体力でも勝負していける県であると私は思っていますので、根気強くあきらめずに頑張っていけば道は拓けていくと思っています。私は福井県から来て、和歌山県の長所や短所をたくさん見てきましたが、やはり良い点はどんどん伸ばさなくては駄目だと思います。

先日、福井県の学力向上担当の課長に声をかけ、和歌山県には素晴らしい学校がたくさんあるから勉強しにおいでと、2人をこちらへ視察に呼びました。そして、そんなに遠い所へは行けないので、和歌山市内の小学校へ連れていきました。2人は大変感動して帰りました。和歌山県にはそういう魅力のある学校があるわけです。そういう学校が各ブロックに必ずあるわけですから、核となって地域を高めていくやり方が最善の道だと考えます。長々と話しましたが感想を交えて話をさせていただきました。

知事 教育企画監にはこれまで3年間指導をしていただきました。まだまだ課題は多いのですが、引き続き取組を続けていただきたいと思います。  
それぞれ、意見をどうぞ。

竹山委員 点数にはこだわりたくないと思っていますし、順位にもこだわりたくないと思っていますけれども、皆さんの努力でここまで成果が出たということはとても良かったと思っています。市町村との連携に関して具体的なお話をさせていただきます。うちの孫が小学校3年生なのですが、これまでは春休みに宿題が出なかったんです。ところが今年は宿題を持って帰ってきたんです。子供が言うことなので確かなことかはわからないのですが、これは学校からの宿題ではなくて、和歌山市からの宿題だと熱弁しておりました。4月に学力テストがあるということもあるのですが、各市町村が本気を出してそれぞれの学年で取り組んで、取りこぼしをしないという姿勢がこのような形で現れたのかと。皆さんがいろいろな方策を考えてくださった一つだろうと思います。やはり家で積極的に宿題をできる環境の子供たちばかりではないので、そういう形で学校主導で子供たちの学力を上げるという風にしないと、家庭教育だけに頼りすぎていくと格差が、特に小さい子供には出てくると思うので、できるだけ小さいうちにみんなの力を取りこぼさないで、高学年に送っていくという取組ができるといいなと思います。

佐藤委員 先ほど、牧野教育企画監が最後に言ってくださった読書のことを今回もお話しさせていただきたいと思います。やはり、成績のことを言わないといっても全国で一番下というのは大変目立つものですよ。学力は簡単に身に付くものではないのですがやはり、じっくりと腰を据えて、長い目で子供たちに力がつくようなことをやっていかなくは駄目ではないかということ、何年か前に教育委員同士で話したことを思い出します。本当に事務局の皆様の努力や牧野企画監の熱意などのいろいろなものが一緒になって、今回こういう結果が出てきたと思うので、じっくりと本当の学力につながる読書に、もっともっと力を入れていく必要があるのではないかと思います。学校によってはその辺を見据えていろいろ努力しているところもあって、学校に入るとすぐにテーブルが置いてあって、そこには図書委員が選んだ本がさりげなく置いてあるとか、地域の人が寄付してくれた本、例えばひまわり文庫というようなものを設置しているとか。夏休み中はお母さん方が自主的に当番で図書館に座りましょうと言って図書館がずっと開かれている。本を寝っ転がって読めるところもある。そのような環境づくりを地域や学校がやっているところもありますし、なかなか学校の先生が忙しくて、図書館まで行き届かない場合もありますが、そういった学校には読書環境について、もう少し意識をしていただけるようにしてもらえたらと思っています。



野村委員

学力については、今年度は今報告があったように全国と同等のレベルになったということで、私が3年前に教育委員になった頃はいろいろと言われることがありましたが、本当にありがとうございます。ただ、牧野教育企画監の話にもありましたけれども、私が常々思っていることは、先生方が子供たちが変わるためのシステムづくりについて、いろいろと工夫したことでここまでこれたのだと思います。授業で学んだ知識を生かす経験、宿題も含めて学習をさせることと同時にもっと大事なことは、他校に学ぶということだだと思います。先ほどからお話がありましたように、県内にも素晴らしい学校がいくつもあると思うので、いろいろ課題がある学校は、モデルとなる学校をどんどん見に行ってみて子供たちの授業に生かすようにすることがとても大事になってくると思います。そういう取組をこれから和歌山県の先生方に広く取り入れてもらえれば、学力がさらに一歩でも前に進むことにつながると考えていますのでよろしくお願いしたいと思います。

桑原委員

こうした学習の習慣づけというのは、やはりしつけだと思います。前回の総合教育会議の時にしつけは一つから九つまでの「つ」のつく時期にしつけよというお話をしました。思春期までに習慣づける必要があると思います。それに加えて先生方が一生懸命になって、子供たちに頑張る姿をモデルとして見せたのではないかと思うんです。しつけというのは、してはいけないことでなく、していいことを教えるのがしつけですから、して良いことを先生方が身をもって示したのではないかと思います。学習の習慣づけを行うには、家庭の力が大きいのですが、家庭で勉強しておきなさいと言うだけ言って放ったらかされたのではないかと。具体的にどのように学習するのか良いモデルを示すことがしつけには必要で、それを先生方が身をもって工夫しながら伝えていたのではないかという感じがします。また、押しつけだけではなく、学校へ行くのは楽しいと言っているわけですから、そういう意味では不登校対策とも良い方向で関係してくると思います。

また、課題としては復習の面が弱いということもありますので、家庭との連携をもっと考えなければいけないのではないかと考えています。不登校の課題も小学校の低学年から出てきています。むしろ解消率の方が高いわけですから、そういう面では、家庭での愛着の課題というのもあるのですが、先生や親との信頼関係をつける中で発達の段階を追った関わり方が家庭でもできるように学校から地域に発信していく必要があると思います。

沼井委員

今、お話を聞いていて、学校での授業への取組については良くなってきたのかなと、資料を見ながら思っていました。ところが、家庭教育に問題があるのではないかと思います。宿題はわりと取り組んでいる数値が出ているのですが、予習や復習は低い割合となっています。それでは、その時間何をしているかといえば、スマートフォンの使用に問題があると思います。2時間以上、3時間以上、4時間以上と全ての項目で使用している割合が高くなっている。それは

なぜかと、資料を見ていて思ったのですが、スマートフォンの使用について保護者とルールを決めていないのではないかと。そういう子供は約束していないから家へ帰ったらある程度宿題だけして、後はスマートフォンを触っている。そういう子供が多いのではないかと。私もPTA出身で、スマートフォンについて親対象に研修会などをするのですが、毎年継続して和歌山県の子供はスマートフォンの使用時間が大変長い。このような現状を知らない保護者はたくさんいると思うので、毎年継続して研修を続けていくことが必要かなと思います。

知事

ありがとうございました。皆さんいいお話で。私も少しお話しさせていただきます。私は実は疑っています。だいたいこのように結果が良かったら、和歌山県というのは油断しやすいんですよ。来年またリバウンドするかもしれないなど。疑っているというのは、リバウンドするのではないかとということを決めつけているわけではないんです。こうではないかということをもう一度お聞きしたいのですが、大堀課長の説明はとても積極的で、実はよく分かったんですけど、もう少しいいじわるなことを聞きたいわけです。逆にその前提のところかというと、本当によくやってくれたなど。聞いてたら情熱がよく伝わってきて偉いという風には思いますので、それが前提です。実は問題集をやらせたら成績は一発で上がるんだと、ずっと私は言っていたんだけど誰も実行しなかった。実は、一昨年かその前に一回実行したんですよ。それで、ちょっと上がったんですね。そしたらまた下がったんですよ。ですので、またやったのではないかと疑っているんですね。先ほどの竹山委員の和歌山市の宿題の話。あれもちょっと疑っているんですね。試験の前に練習をさせておいたら絶対に上がるんですよ。それからもっといえ、わからなくてもいいからわからない時は絶対に1と書けよとか言っておいたら5分の1の確率で当たるわけです。全体としたら5点ぐらいすぐ上がるんですよ。5点上がったなら日本一ですよ。それをちゃんと実行しないから。それから元々よくできる子供については何もなくてもできているのだけれど、低い点数の子供を全体的に5点上げるのは簡単なんですよ。それをやったのではないかとということを実は思っているんです。そこで、それを聞くとそんなことはありませんとなるので、実際に、今までとどこが違うのかということ进行分析している資料1の2枚目の重点取組のところの④⑤のところですが、具体的にいうとどのようなことをしたのでしょうか。もう少し詳しく教えてほしいということです。

大堀学びの丘  
学力対策課長

④の国語授業事例集（DVD）のところですよ。県内小中学校から力のある先生に集まっていたいて、こういう授業づくりをしてほしいという授業の動画を撮ったり、予算のこともあるので、動画は小学校1中学校1なんですけど、後の5つは静止画なのですが、ナレーションを入れながら子供たちにこういう活動をさせてほしいというような授業の事例集を作りました。これは、実は制作にとっても時間がかかりまして、1月にその資料を使って研修会を全ての地方単位で実施してこの事例集をこんな風に使ってほしいという説明をしました。学

校では、国語の授業づくりについては課題となっているので、例えば授業研究する時にそれを見ていいところを使ってみるとか、本県も若い先生方が非常に増えてきていますので、どうしてよいかわからないという時にはこれを使ってみる。ただし、授業改善というのはかなり時間がかかると思っています。まだまだ、今年も引き続きやっているところです。いわゆる即効性というのはないのかもしれませんが。

一方で、⑤の国語マスター問題集ですが、30人程度の先生方に集まってもらって作りました。作るにあたっては、特に「全国学力・学習状況調査」であったり、県でやっている「到達度調査」で、国語でこういう課題があるんだということをまずはその先生方にお伝えしました。読む力、書く力がないということはとても感じているんですが、データを分析しますと、先ほども説明しました言葉の基礎・基本のところがとても弱いんです。また、4つ選択肢があって、適する言葉を選ぶというような選択問題がとても弱いという課題があったので、そこもお伝えした上で、課題を改善するような問題にしてくださいというお願いをして作りました。そうしたら、先生方はそれだけではなくて、実際現場で使う時は、もっとこうしたらいいのではないかとたくさん提案をしてくれました。例えば、授業の後に短時間でも学習の成果を確認できるような問題です。特に小学校1、2年生であれば問題数は少なくてもいいから繰り返しできる問題が必要であるとか、小学校5、6年生になれば、国語以外に総合的な学習の時間などを絡めて、和歌山らしく和歌山県のことを素材にした読み取る力をつける文章を取り入れるなど、いろいろなアイデアを持ち寄ってくれて作成しました。これは、現場の先生方から使いやすいという評判でして、学校訪問へ行った時に「これを使ってください」と言う前に、「使っているよ」という声をよく聞きました。授業で学んだことが身に付いているか、この問題集を繰り返し使ったことが、結果的に基礎・基本の部分で特に結果が出たのかなと思っています。ただし、B問題のところではまだまだ課題があると思っていますので、引き続き取り組んでいきたいと思っています。

知事

わかりました。ここで私が抱いていた疑問は氷解しました。本格的ですね。例えば模擬試験用の問題集を作ってやらせましたとかだったら小手先だけだと思うんだけど、そういう根本的な部分でおやりになって、今のお話を聞いていると私はすごいと思う。後はそういうことをどんどん継続していくということが大事でしょうね。実は先ほどのことで、自分の意見を言いますと、牧野教育企画監のドリルの話とほとんど同じなんです。本来は考える力ですから国語は、まず大事なのは問題集をどんどんやらせなくてはいけない。詩を読んで、感想を言わせるよりも、時間があったら問題集をがんがんにやって、この人は何が言いたいのかということをごりごり聞くような問題をしていく方が絶対いいと思ってるんです。まあ、そこまでいなくても、今の最後の話でありましたように教えたことを確認できるようなものを積極的にやっていくということは大事かなと思いますね。実は、もう一つの私の意見なんですが、宿題をたくさん

出したらいいと思っています。よく予習復習をしてこいと言うけれど、仁坂少年は絶対に嫌でしたね。なんでそんなことをしなくてはならないのかと、一切しませんでした。直感的に嫌だと思って怠けていました。予習なんか無理矢理やらせて、先生にも同じことを言われたらやらなくなりますよね。だから、そんな子にはやらせなくていいと思うんです。復習は分からなかったらやればいいし、分かっていたらしなくていいと思うんです。でも分かっているか分かっているかには生意気な子供はわからないんです。だから、無理やり分かっているようにするためには宿題を出したらいいと思うんですね。中学生の時に生意気にもいい教育しているなと思ったのは、ある先生が英語の文節というか短い文章を丸暗記してこいという宿題をバンバン出すんですね。宿題だから、怒られるのが嫌で仕方なくまじめにするわけですね。そうすると教科書で一回習って、それをさらに覚えることで使えるようになるんですね。そういう風に本当に身に付けさせたいところについては、宿題として出せばいいと思うんです。宿題として出したものについては、ちゃんとやったかという確認をして、みんなの前で発表させたら、ちゃんとやっている子供はうれしいですよ。親も宿題やったかとは言いやすいけれども、復習したかとは言いにくいですよ。机の前に座れというのと同じですよ。

質問ですが、学校現場で宿題というのはどのように考えられているのでしょうか。たくさん出すとかわいそうだという風に先生も思っているのか、あるいは結論は一緒なんですけど、採点とかチェックが大変なのであまり出さないようにしているのか、たくさん出しているのか、現実にはどうなっているのでしょうか。

前田  
義務教育課長

小学校では宿題をよく出しております。学級担任がほぼ全教科を担当していますので、宿題の量もよく分かっているので、家でできる範囲の量を考えて出しています。低学年については少なめになっていて家の人にも確認してもらうようにもしています。中学校は教科担任制になっていて、学校によって出し方が様々で、統一して出しているところもありますし、教科の先生に任せているところもあります。

牧野  
教育企画監

学校訪問をさせていただいて見てきたところですが、小学校はだいたい3点セットですね。音読、漢字ドリル、算数ドリル。ページ数を示して。

知事

それは、ほとんどの子供に課しているんですか。

牧野  
教育企画監

そうですね。小学校については量的にいうと福井県とそう変わらないですね。中学校については福井県の方がとても多いです。宿題の中には、次の授業に使うための、例えば国語の語句調べとか、新出漢字にラインを引いてくるとか。ただ、各教科で宿題がたくさん出てきて、生徒から文句が出る時がありますが。中学校については福井県と和歌山県ではかなり量が違う。これは、どこに原因

があるのかということですが、学習塾に通う率が全く違う。福井県は小学校で38%、和歌山県は53%。中学校に至っては、福井県は49%で半分以下ですが、和歌山県は70%を超えているんですね。要するに中学校で宿題を出しすぎると親からクレームが出る。塾に行けなくなってしまう、塾の勉強ができなくなってしまうと。これははっきり言ってましたね。こういうことがあるから宿題も遠慮気味になってしまう状況があると。

知事                   その時に、牧野教育企画監が客観的かつ公平的に思われるのは、学習塾に行っている子供はプラスになっているのかマイナスになっているのか、どうなんでしょうか。

牧野  
教育企画監           私自身、個人的にはマイナスだと思います。お金もものすごくかかります。何年前の統計で、予備校や学習塾を含めて親が年間支出する教育費は、全国的にも高く、和歌山県の親は皆さん、教育にお金をかけているなと思いました。よく考えてみると、そんなことしなくても学校で一生懸命やって先生の言うことをよく聞いて、一生懸命宿題をやって、分からないところは先生に聞いてやれば学力は身に付くし、塾はお金の高いところはマンツーマンでやりますから。マンツーマンだといわゆる対話的な学びができないですからね。友達の意見を聞いたり、友達の意見を踏まえて自分の意見を言うとか、そういう学習ができないです。ですから私個人としてはトータル的にマイナスかなと思います。

知事                   マスコミの方も聞いておられるので、是非報道してやってください。高瀬部長、言いたいことがあるようなのでどうぞ。

高瀬企画部長       教育費についてですが、今データを持ち合わせていないのですが、前に見た統計では、やはり和歌山県は全国的に見ても教育費にけるウエイトはトップクラスです。ちょっと聞きたいのですが、資料には、今年の中学校3年生の子供が成績が良くなかった平成26年度の小学校の時の成績を載せてくれているんですが、平成27年度の成績が良かったのであったら、この子供たちが普通に考えたら来年は中学3年生になったらとても良い結果が出るはずだと考えられますよね。やはり問題集をよくやっていると成績が上がると思うんです。今年度の子供に対して今まで取り組んできたことと、平成27年の子供に取り組んできたことをもう少し絞ってその違いを分析してみたらいいのではないかなと思います。

知事                   宿題の話に戻しますと、牧野教育企画監からもお話があって、僕も話をさせてもらったのですが、宿題の出し方のテクニックというのがあると思うんですね。小学校は、しっかり宿題を出されているようですね。中学校については、出せ出せといっても塾もあるし、勉強嫌いになってしまってもいけませんよね。これについても教え方が上手な人の話なども聞いて、宿題はこんな風に出した

ら生産性が上がりますよ、というようなことをみんなで考えてみたらいい気がしますね。

次に読書の話が佐藤委員からあったんですけど、私はさっき問題集でもやったら勉強ができるようになるといいましたが、その前提として読書をものすごくやっていないと駄目なんですね。急に問題集だけやれと言ったってそれは駄目なんです。読書をたくさんやっている子供は文章に慣れ親しんでいることで、問題を解く技術をちょっと勉強したらものすごく点が高くなっていくと思います。この組み合わせが大事なんです。前提としてはやっぱりたくさん本を読んだら、本にはいいことがたくさん書いてあるから、ものを考えることを本は教えてくれる。自然にそういうことになると思うんです。本をたくさん読ませたらいいと思いますね。この点については教育委員会はどんなご指導をなさっているんですか。

前田  
義務教育課長

今、読書をしないという子供が小学校でも中学校でも非常に多いんです。読書に親しんでもらうためには、学校図書館に行って勉強したいという環境を整えるために、学校司書や学校ボランティアに図書館での読書環境を整えてもらって、本が借りやすく勉強したいと思うような学習環境を作っていきたいと思っております。今、新政策でも取り組んでいるところです。

もう一つは、授業でもどんどん活用して、調べ学習などを通して自分の課題解決をするなどの取組も進めていきたいと思っています。5月に学校図書館の担当教員を集めて、授業での図書館の活用の仕方や工夫などについての研修をしました。また、10月に学校司書の研修会もする予定ですが、一層読書活動を充実させていきたいと考えています。

知事

ありがとうございました。他に読書について何かありませんか。

野村委員

あまり具体的な話ではなくて恐縮なのですが、本をたくさん読んでいっているうちに文章に慣れ親しんできて、それが授業を聞きながら理解する力にもつながっていくというのは、佐藤委員をはじめ、皆さんがおっしゃっているとおりだと思います。私は、お願いというかこんな風にやったらどうかなと思うのは、学力テストをせっかくやっているし、県の到達度調査もやっているわけですから、そういった調査を活用しながら読書量と成績の関係から課題を把握したらいいと思うんです。本当に学力が身に付いている子供は、想像ですけども読書量も多いのではないかなと思うんです。具体的にどのように読書活動を進めたらよいかを具体的に県内の学校や保護者に広報していくことが一番大事なのではないかと思っています。やはり、保護者はいろいろな形で子供の教育については一生懸命考えているわけですから、それをどのような形で伝えていくのが大事ではないかと思っています。

もう1点、話が少し逸れますが、先ほど、塾と教育費のお話が出ていましたけれども、これはある意味我々に跳ね返ってくることで、和歌山県の塾にかけ

る教育費が高いというのは、自己批判しているようなところがあって、本当は、なぜ、そうなっているのかということの研究しないと、これからも同じことが続いていくことになると思うんです。塾を否定するわけではないのですが、こんな風に学校教育でもカバーできますよという形をとることが我々和歌山県の大事なところではないかと思えます。ちょっと話が逸れてすみません。

知事

話が逸れたついでに、塾について、私見を述べさせていただきます。

これは、牧野教育企画監から話があった、地域や家庭と学校が遊離しているという話と全く同じだと思うんです。つまり、どういうことかということ、学校に任せっきりで適当にやって頂戴ね、と親はとりあえず学校に任せておいて、自分たちはあまり考えない。丸投げ。それで指導もしない。だけど、学校であまり成績が良くなならない、とくに公立学校に任せておくと不安だし、ということを感じてしまって、学校の代わりに今度は塾に丸投げしてしまったら何とかなるだろうと、こう思ってしまうというのが一番の原因ではないかと私は思うんですね。これは親が何も考えていない。子供も考えていない。私は塾はいいと思えますよ。ただ、何のために行くかということを考えてないとマイナスになると思うんですね。例えば、ものすごく難しい大学に行きたい。あるいは高校に行きたい。まあ、塾へ行かなくては行きたい学校へ入れないな、と思ったら塾に行けばいいんですね。先生の教え方が下手だと思うので、教えてほしい科目と分からない科目について教え方が上手な先生に習いたいということで塾に行くのなら分かるんですね。ところがなんとなく塾に行ったら偉くなるらしいなどと思って行くのは駄目なこととしか思えないんですよね、親も子供も。

同じようなことを私は20年ぐらい前に経験しているんです。ある学校ができたときの話です。その学校はととても成績がいいらしい。なぜいいかということを実際の学友に聞いたら、あそこは夏休みがほんの2、3週間しかなくて、一生懸命勉強させるからいいんだという話でした。私はそれは違うのではないかと。皆と同じように勉強していい場合と、平均的な人であったらいいかもしれないけれども、勉強についていけなくなったら、ついていけなくなることの再生産になってしまうと。よくできる生徒はばかばかしいから、自分一人で勉強した方がいいのではないかと。だから夏休みはたくさんあった方がいいのではないかと。言ったら怒られて、お前はだいたいちょっと勉強ができたからそんな偉そうなことを言って、僕たちの身になって考えろと言われたんですよね。でも、今でも僕たちの身になって考えてもおかしいと思うんですね。それはやはりその親が子供のことを考えてあげて、どこが足りないかということをやんと分かって、それで公立高校へ行っても、欠けているところは補えばいいんだけど、欠けていないところまで補う必要はないんですね。それから、たくさん勉強させるところへ行ったら偉くなるというのは全く嘘だと思うんですよ。従って、これからコミュニティ・スクールとか、教育委員会の発信力とかいろいろあると思うんですけど、そういうことをどんどんおっしゃったらいいいのではないかという風に思えます。それから、読書に戻らせていただきますが、

他にご意見はございませんか。

竹山委員

音読も、子供たちがスピードを競うかのごとく早く読むことに一生懸命で、文節を区切ってあまり読まないんですよね。とにかく回数をこなせばいいと思っているので、音読のねらいが子供たちに伝わっていないです。私はガールスカウトの活動で高校生たちと資料を読む時に、非常に優秀な高校に通っているのに文章が読めないんです。たぶんテストの文章は読めるんでしょうけど、普通の資料とかは読めないんですよ。私たちはトリセツが読める女性を育てるということをよく言うのですが、小学生などもそうですが、国語の本が読めることが読解力だと考えて、先生方も理科や社会の教科書を読もうなんていう気もない。国語だけが国語の力をつけるだけではないという視点をもって、道徳の本でもなんでも文節を区切ってちゃんと理解をするという、様々なところから取り組んでいかないといけないと思います。国語は国語ということではなく、広い視野で考えていった方がいいのではないかと思います。

佐藤委員

2つ思い出したことがあります。先日ある高校へ行って、読書委員の活動を見させていただいたのですが、司書の先生が図書館を知らない子供が多すぎるとお話しされていました。自分は図書館でコンサートをしたりいろいろなことを通して、まずは図書館というところを知ってもらうということから始めたということだったんです。そうしたら、図書館は楽しいところだなという感じで、少しずつ図書館に来る生徒さんが増えていったということでした。

それから、先日TOEICの資格を持っている外国に住んでいて、日本に帰ってきたという方と話をする機会がありました。アメリカの子供もカナダの子供も日本の子供よりも目の色を変えて一生懸命勉強すると。それは、彼らが自分が将来何になりたいのかという考えをはっきりもっているから、真剣に勉強するんだと。日本の子供の優れているところは何かと尋ねたら、集団で何かをさせたら、どこの国の子供にも負けないということも言っていました。あなたは子供の時読書はしたかと尋ねたら、図書館にはしょっちゅう行っていたし、一時期、「ズッコケ三人組」という本にのめり込んで集中して読んだ時期があって、本を読むのが好きで読み聞かせもよくしている、という話をしていました。やはり、読書というのは基本的なものをつくる栄養のようなもので、子供たちにいろいろな形で図書館があるということを伝えて、図書館では調べ学習もできるし、本は楽しいなどの発信を学校側から積極的にしていくことも大切なのかなと思います。

知事

それでは、私からもいいですか。前田義務教育課長の説明に私は重大なオブジェクションがあります。意見ですから聞かなくてもいいのですが、読書を勉強といいましたよね。私は絶対やめた方がいいと思います。読書は楽しみですよ。勉強と言ったら嫌になってしまうから。授業とか宿題が勉強。読書は楽しみ、と思ったら読書もスマートフォンもあまり変わらないので、という風に私は





教育長

今の中学校3年生が小学校6年生の時からこうなった、と追跡して結果を出してもらったのは初めてだったんですが、先ほど企画部長から話があったのはそのとおりだと思うんです。つまり、毎年調査をする生徒は違いますから、一喜一憂することではないんです。私はやはり、子供たちがどう成長していったかというところを幼児期からずっと見ていくことが、これからとくに大事になってくると思います。携帯電話の使用状況なども含めて、ずっと結果を子供に返せるんです。ですから、子供一人一人の状況に合わせて指導できるということが大事だと思うんです。順位に一喜一憂することなくというのはそのとおりだと思います。因みに昨年20番台の県が、今年は40番台だということもあるそうで、全国的には順位に差がほとんどないんですが、その順位から見えてくる理由や課題もあります。先ほどからお話してきたようにいろいろな根拠もあります。それらの課題を潰していくように対応していきたいと思っています。読書に関しては、市町村教育委員会も考えてくれています。これまでなかなか工夫ができてなかったんです。本の量もそうなんですが、司書の皆さんも学校に入ってくれて、だいぶ子供たちが飛びつきやすいような工夫をしているな、と思っているんです。それも踏まえて、市町村教育委員会とそんなに距離感があるというわけではないです。課題がある学校には、直接市町村教育委員会と一緒に学校に乗り込んで行って、校長、教員と一緒にこの学校の課題は一体何なのかというところをつきとめていったんです。課題のある学校を継続して見て行って、どれだけ良くなったかを確認して、それを全体のものにしていく必要があると思っています。時には、かなり学校に嫌ごとも言いながら課題を確認していったことが私は一番大きかったと思っています。それらを今年は分析して引き続き取り組みたいと思っています。

知事

先ほど、読書のことで言い忘れたんですが、読書好きになる子供の何割かの話なんですが、わりと相関関係があるのが親の読み聞かせだと思うんですね。寝る前によく本を読んでもらっている子供は本が好きなんです。それともう一つは、親が本を読むのが好きだと子供も好きになるんです。ですから、やはり読書というのは、親の問題でもあるんですね。幼児教育との接続の問題を今教育委員会ではやろうとしておられるでしょ。そういう時に保護者や幼稚園、保育園が本を読み聞かせてあげて、さっき話がありましたように文節で区切った読み方は大人なら感じが分かっていますよね。ウサギの気持ちになったりしてね。ああいうようなことをやっていったら、子供はストーリーというか物語に対する親近感がものすごく身に付くと思うんです。そういうことを発信して、子供の成績を上げようと思ったら、塾よりも本はいいですよとかを発信していったらいいのではないかなと思います。

高瀬企画部長

読書のことでですけど、県内のある私学の校長先生から聞いたのですが、年間1,000冊読んでいる子供がいて、ものすごく成績がいいらしいです。それで、その学校で子供たちの年間の読書量を調べてみたら、読書量と成績はほぼ比例

しているとのことでした。本のジャンルは本当に様々なものを読んでいて、何でもいいから読んで1,000冊読む子供も出てきた、とのこと。話によると、本を読むといろいろな知識が入ってきて、勉強ばかりしなくても成績もよくなる、という話がありましたので紹介させていただきます。

知事

今日は他にも教育長から子供の状況に関する事など、いろいろ議論するよう言われていたんですけど、そろそろ時間になりましたので、学力の問題について議論したということで、また、次の機会にいろいろお話しをしたいと思います。今日のことは、私も個人的に過ぎる意見も言ったし、大事なことも言ったと思います。皆さんもそうだと思いますが、取捨選択して、また教育委員会で体系的な戦略を立てて取り組んでもらいたいと思います。本日は、本当にありがとうございました。

教育長

ありがとうございました。私は「学校が楽しい」「授業が分かる」というようなことが、一番ほっとすることでありまして、塾が居場所にならなくても学校が安心して過ごせる居場所となるのが大事かなと思うので、頑張っやっていきたいなと思っています。

ちょうど今、教育振興基本計画を作っているところです。学習状況調査から見えてくる課題についても議論を重ねていきまして、しっかりやっていきたいと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

事務局

ありがとうございました。以上をもちまして平成29年度第1回和歌山県総合教育会議を閉会いたします。ご出席ありがとうございました。





